千葉介「房総」常胤を生んだ地②

武士団を動かしていたもの

「やあやあ我こそは……」の名乗りは勇猛果敢な鎌倉武士の代名詞にもなっているが、実はこれをやらないとあとで困る。勝った方は討ち取った首の髪に名札をつけ、化粧をして棟梁の前に差し出した。これがいわゆる首実検で、倒した相手の身分や立場によって恩賞の多寡が大いにかわる。名札をつける余裕がないときには直接顔に名前を書いたという。

これ以外にも「おや?」と思うことがある。鎌倉時代の第一級史料である吾妻鏡に面白い記述があるので紹介しよう。

頼朝が再興を祈願した洲崎神社

戦こそ一族繁栄の道

治承四年十一月二十六日（1180年）年老いた女が頼朝の元にやってきた。このままだと愛息瀧口三郎経俊が斬首されると聞いたからである。老母は瀧口家が代々頼朝の家系に仕え忠義を尽くしてきたこと、特に平治の乱（1160年）では頼朝の父、源義朝に味方して討ち死にした身内までがいたこと。経俊が石橋山合戦で平家方についたのは形だけのことで、敵だった者のほとんどが後に許されていることなどを切々と訴え、泣きながら息子の命乞いをした。

頼朝は老母の話を静かに聞いていたが、やがて一つの唐櫃を持ってこさせた。中には鎧が入っている。しかしその袖には一本の矢が刺さっていた……「これは石橋山合戦で矢を受けた私の鎧である」と頼朝は語った。そして「瀧口三郎藤原経俊」と鮮やかにその名が書かれていた矢を老母に見せたのである。我が子が頼朝の命を狙った明白な証拠がそこにあった。老母は寂しく首をうな垂れて帰っていった。

老母の嘆きに心を動かされた頼朝は、その後、瀧口家のこれまでの功労を考慮し経俊の死罪を免じたという。

さて、この記事で面白いのは矢に名前が書いてあったことだ。武士の訓練は「弓馬の道」といわれるように、主力武器は弓であった。この合戦で頼朝方が敗れていたとしたら、頼朝に矢を立てた経俊には当然のことながら恩賞が与えられていたはずだ。そうした時の証拠になるように武士は自分の矢に名前を書いて戦に臨んだのである。

鏑流馬や犬追物といった弓馬の道に長けるのはもちろんだが、戦においては誰よりも目立つことが大切なことであった。源義経が着用していた赤糸縅鎧のように黄・緑・紫・紺地と金色に輝く留め金と、豪華絢爛なのがこの時代の甲冑の特徴でもある。実用性以上に戦争衣装としての意味合いを持っていたのだ。が、それもこれも活躍ぶりを味方にアピールするためであって、一番の戦功である先駆けも彼らはまず証人を立ててから行った。更に、大きな戦には軍奉行が必ずついて、誰がどのように戦ったかを詳細にレポートしていた。と、ここまで書けば鎌倉武士が江戸時代のサラリーマン武士とは「ちょっと違う」ということがお分かりいただけたと思う。千葉介常胤が呼吸していた時代の房総地域もこうだったのだ。彼らも弓馬の道にいそしみ、矢には名前を書き、きらびやかな甲冑を身にまとい、領地を守り、一族の繁栄を背負って戦に臨んだのである。

荘園と武士

当時の荘園分布を見ると千葉庄とか萱田厨、負野牧、大須賀保をはじめとして開墾された土地の大部分は荘園となっていて、相続や権利、それに境界をめぐってのいざこざが絶えなかった。ちなみに、厨とは伊勢神宮などの力を持つ神社に寄進された荘園のことで、牧とは馬を生産する牧場のこと。保は国司の勢力下にある荘園で国衙と言われる公の組織に属した。庄も厨も牧も保もこれらの大部分は土地に根付いた豪族達が開墾し広げた土地である。にもかかわらず、京都や奈良の権門勢家に差し出すその理由は、名義上の持ち主の特権と威光によって生き残ろうとする涙ぐましい彼らの知恵なのである。したがって寄進先が落ちぶれると更にその上に有力者の名前が連なるということもごく普通にあった。

絵図などで屋敷の門前に髭面の武士がたむろしている場面を見ることがある。これこそが地方豪族が領主に仕えた証だ。身分の低かった当時の武士は都へ出て、貴族や皇族といった領主のために館の警護にあたった。更に皇居や院の警護もあり、これらは大番役と呼ばれ武士の義務とされたのである。安房や上総、それに下総の豪族達も、律令という朝廷や貴族のために作られた任組みの中で、自らの利益を権門勢家に差し出し、その上更にこうした役務にも耐えてきたのである。ところが、頼朝の登場はその状況を大きく変えた。

地位向上のために

鎌倉に出来た武士の政権は武士の権利を守ることを第一義としていた。問注所を作ったのもそのためで、それまで力関係で解決されてきた土地や相続の問題が「裁判」という公正な手段で解決されるようになった。無駄な血を流さないで済むことになった御家人たちは大いにこれを喜び、頼朝の公平で公正な姿勢に尊崇の念と親しみを込めて「鎌倉殿」と呼んだ。更に頼朝は朝廷に迫りそれまで3年間という長きにわたって課せられた大番役を半年に軽減させた。こうした政策や朝廷に対する要求は関東武士団の長年にわたる悲願でもあった。

千葉介常胤や上総介広常、あるいは三浦義澄、北条時政などといった有力武士の助言はもちろんのこと、数多くの武士の願いが原動力であったことはいうまでもない。

これによって日本の歴史は大きく変わっていくのである。

※棟梁＝国や一族、集団の支えとなる指導者のこと。
※権門勢家＝貴族・皇族など、免税や治外法権などの特権を持った有力者のこと。
※御家人＝将軍と主従関係を結んだ武士のこと。
※問注所＝民事の裁判所

「探してみよう近くの荘園」

平安時代から鎌倉時代にあった安房・上総・下総三国の荘園です。現在では、地名や漢字が変わっているところ、それに他県になっているところも含まれていますが、お住まい近くの荘園を探して、当時をいろいろと想像してみて下さい。

【安房】
白浜牧・丸厨・群房庄・鈔師牧・阿麻津厨・東条厨

【上総】
武射厨・新田庄・藻原庄・大野牧・田代庄・千町庄・伊北庄・伊隅庄・負野牧・菅生庄・飫富庄・新田庄・畔蒜庄・天羽庄（※新田庄は山辺郡と畔蒜郡の2カ所にあります。）

【下総】
豊田庄・長洲牧・相馬厨・下河辺庄・松戸庄・葛西厨・大結牧・夏見厨・萱田厨・八幡庄・高津牧・千葉庄・臼井庄・大戸庄・神崎庄・葛原牧・大須賀保・白井庄・遠山方御厨・埴生庄・印東庄・木内庄・玉造庄・北条庄・千田庄・匝瑳南条庄・橘庄・立花厨・海上庄・三埼庄

参考資料「荘園分布図・上巻」竹内理三編　吉川弘文館

多賀譲治　プロフィール

多賀歴史研究所代表・元玉川大学教育博物館研究員。フィールドワークを重視した歴史研究を続け、NHKをはじめとした歴史番組の時代考証、新聞への連載、講演会などの活動を行っている。玉川大学・学園に設置された「鎌倉時代の勉強をしよう」は鎌倉時代のWEB学習ページとして国内最大のもので、学校教育に限らず鎌倉時代に興味ある人にとって役立っている。
著書に「知るほど楽しい鎌倉時代」（理工図書）などがある。

一番身近なITパートナー　OA機器・測量器 のことなら
いつものだから 確実に……
SOKKI 千葉測器
本社　千葉市中央区都町 2-193　TEL　043-231-2351　サービス拠点　27 拠点（千葉・東京・茨城）
協賛　SOKKI 株式会社 千葉測器　CHIBA SHINKIN BANK 千葉信用金庫